オピニオン

救急搬送 増える高齢者

視点 2013

広島市消防局管内

救急車で病院に到着した患者を運び入れる救急隊員や医師たち（7日夜、広島市西区の荒木脳神経外科病院）

広島市消防局が管轄する同市や広島県海田町、安芸太田町などの救急搬送数は昨年4万6002人に上り、過去最多となった。特に高齢者の増加が目立つ。一人暮らしや高齢世帯の場合、持病や常用の薬、連絡が取れる家族の確認などに手間が掛かることも多く、受け入れ病院にさらなる負担が掛かる。万が一に備え、救急患者の情報を周囲がつかみやすくする工夫が求められている。（永里真弓）

持病や常用薬 確認課題

7日午後8時前、広島市西区の荒木脳神経外科病院に救急車が到着した。車輪付きの簡易ベッドで運び込まれた患者は安佐北区の80代女性だった。

「2日前に激しい頭痛がして、今日は足がふらつく」。女性は当直の谷到医師(42)の問い掛けにそう答えた。脳梗塞だった。幸い夫が付き添っていた。かかりつけ医や既往症、服用中の薬をスムーズに聞き取れた。

谷医師は「高齢だと持病や隠れた病気がある患者が多い。適切で迅速な治療には、こうした情報が欠かせない」と説明する。これまでも、手術が必要なのに家族と連絡が取れない患者もいた。「診療以外に手をとられる」という。救急隊員と病院の間での情報伝達に時間がかかれば、救急車が次の現場へ向かう時間を遅らせかねない。

3分の1占める

同病院は市内の26病院で夜間に入院が必要となる患者を治療する2次救急の輪番制に参加している。2日に1度のペースで当番を担当する。同病院が夜間に治療した患者はことし4～9月で計1277人。うち約3分の1を高齢者が占めた。

広島市消防局によると、救急搬送数は昨年、現管轄になった2007年に比べて1%増えた。65歳以上の高齢者に限ると20%アップしている。

一人暮らしや認知症の人が増える中、「付き添いがないと断る病院も多い」と同病院の荒木攻理事長(70)。高齢患者の情報を病院側に伝える仕組みについて「病院だけでの対処は限界がある。地域全体で解決していく姿勢がいる」と求める。

情報把握 地域ぐるみで

安佐北区では、28の地区社会福祉協議会のうち、20地区社協が「救急医療情報キット」を約1500の高齢者世帯に配っている。キットはかかりつけ医や既往症などを記入して自宅に保管。救急隊員に手渡す。

キットは冷蔵庫の中に置くように勧め、民生委員が半年～1年ごとに巡回して記載内容を更新する。安佐北区社協は「キットをきっかけに、地域の高齢者の暮らしぶりもつかめた」という。

ただ、配布を始めた07年以降、救急隊員がキットを見つけて病院に連絡したケースは数件あったが、効果や使いやすさの検証は十分ではない。

ルールの浸透を

県社協によると、配布元が社協や市町、町内会など多様で、書き込みの様式が異なるという。県全域でどれぐらいキットが普及しているのかも、把握が難しい。キットの存在を知らない病院もある。上田正之事務局次長(58)は「配って満足するのではなく、体調の異変に気付ける地域づくりが重要だ。病院との情報共有も課題」と指摘する。

「いきなり119番」も減っていない。緊急事態を除いて、まず在宅当番医の開業医やかかりつけ医が対応し、重ければ2次の中規模病院へとつなぐルールの浸透が求められる。広島市医師会理事の中西幸造医師(62)は「どんな状態でも取りあえず救急車を呼ぶ傾向がうかがえる。いざという時どうするか、どんな治療を受けたいのか、家族や地域でより話し合い、備えてほしい」と呼び掛ける。

クリック

救急搬送　総務省消防庁によると、2012年の全国の救急搬送数は速報値で524万9088人（前年比1・3%増）で、過去最多。広島県は10万9144人（同0・1%増）、広島市は4万6002人（同0・8%増）。市消防局によると、救急車の現場到着までの所要時間は5・2分で、03年と比べ1分遅い。現場到着から病院に出発するまでは19分で03年比で7・7分延びた。